

国文学者田中重太郎の『枕草子』研究

鈴木徳男

はじめに

『春は曙』（私家版、二〇〇〇（平成一二）年二月）は、田中重太郎の十三回忌を迎えて出版された遺稿集である。「あとがき」に、夫人であり当該書の発行者でもある田中美保子は次のように記している。

田中重太郎は若い頃から、枕冊子の校本・全注釈・辞典（事典）の刊行を念願としていた。『校本枕冊子』全五巻は、（中略）諸先生の御協力を得て苦難の末刊行した。『枕冊子全注釈』五巻もようやく成ったが、常に病魔と戦っていた田中重太郎にとって、枕冊子事典を刊行することは夢でしかなかった。先年（中略）枕草子事典が編纂されることになった由で、田中重太郎の志を受け継いだ旨、雨海先生より下玉利先生を通じて御挨拶があった。彼岸の主人もことのほか喜んでいることと思われる。^{*}

国文学者田中重太郎の学術的業績は、『枕草子』研究における、「校本」の作成、「全注釈」の完成にあった。後述の『校本枕冊子』下巻に添えられた「下巻末に」の文章に「今後わたくしは附巻の編

纂に全力をそそぎ、附巻完成後は、宿望の枕冊子総索引を編みなほします。これは、校本を底本とした諸本本文の精密な語彙索引です。そして、校本と総索引とをもとにして枕冊子辞典——これは語彙の意義を明らかにしつつその前後の文を引いたものです——をつくり、かたはら枕冊子の全注釈書の執筆にかかりたいと思つてゐます」と述べている。以下、国文学者田中重太郎の学問について、その著述をたどりつつ考察する。^{*}

一、田中重太郎の略歴——文検受験の学者

儀同保『独学者列伝』（日本評論社、一九九二（平成四）年）「高等教員検定合格者列伝」は、田中を「この項の検定合格者の中でも、合格年齢と学位取得の年齢では、異色の存在といえよう」として一項目を立て、次のようにある。

大正六（一九一七）年七月七日、京都市上京区に生れ、間もなく近くで商業を営む叔母夫婦の養子となり田中姓になった。養親が家業をつがせるつもりで、京都市立の第二商業に入学、昭和一〇年に卒業した。

このころから国文学に興味をもち、家業は継がず、大阪の朝日新聞社営業局に会計係として勤め、三五円の月給は家に一〇円入れ、残りはほとんど本代にかけた。昭和一年の文検中等教員の国語科に一九歳で合格し、翌年新聞社をやめて立命館中学の教諭となり、一二年には漢文科にも合格した。

これに満足せずさらに研究を進め、昭和一四年に高等教員検定の国語科に合格、二二歳であった。これにより昭和一六年二四歳の年から立命館大学予科の教授に就任したが、前年の二月一日(当時の紀元節)を期して枕冊子を専門に研究しようとして計画していた。

戦後は池坊短大教授、相愛女子短大の教授などを勤め、昭和三五年に二〇年にわたる研究を『枕冊子本文の研究』にまとめ、これを大正大学に学位論文として提出、四四歳で文学博士になった。

少年時代から健康には恵まれず、肺結核慢性心肺気腫、肝機能障害から高血圧まで多病であった。人物素描に「商業出身のため、珠算、暗算は五ヶタまでは自信があるという。菜食主義で魚、肉は一切とらない。和服を好むがやせ形長身の体によく似合い、腰掛と机では原稿が書けないので、列車の中でも仕事となるとすぐあぐらをかく。趣味は謡曲と易占い。どちらも二十年を越すこの道のベテラン。特に後者は八卦はもとより、人相、手相、姓名判断から四柱推命学というむつかしいものにもまで及ぶが、まだまだ未熟、今後統計的データを集めてから発表する」とあり、旅行好きだが最近では身体の具合からあまり

出歩かない」といつていたが昭和六一(一九八六)年六八歳で死去した。

平安朝期文学研究の權威、枕冊子研究の第一人者で、『枕草子の精神と釈義』(昭和一八年、旺文社)をはじめ『枕冊子(日本古典全集)』(二二年、朝日新聞社)、『校本枕冊子』五卷、『枕冊子研究』(古典文庫)、『清少納言枕冊子の研究』(三五年、笠間書院)、『枕冊子全注釈』などがあり、ほかに『風流古川柳』(三四年)、『小倉百人一首解釈』などがある。

自伝を含めた身辺の諸事をまとめた随筆集に『枕冊子三十五年』(笠間書院)がある。

「養親が家業をつがせるつもり」とある。田中家の職業は商人で、いわゆる土屋であった。田中は「建築材料商」といつたり書いたりしたといい、セメントや石灰の小売(はかり売り)をし配達もしたという。『枕冊子三十五年』所収「西ノ京界隈」(初出は『洛味』第二七〇号)参照。この家業を継ぐことなく「文検」(文部省検定試験)による国語の教員を目指した。はやいころから国文学への止みがたい思いがあり、難関試験に合格して独学で道を開いた。このことは、田中のあくなき情熱の基底にあると思われる。

「昭和一一年の文検中等教員の国語科に一九歳で合格」とあり、さらに「昭和一四年に高等教員検定の国語科に合格」とある。昭和一四年の文検国語科の受験者数は六五三名(男六一〇、女四三三)で、合格者五七名(男五四、女三三)。合格率八・七三%(毎年ほぼ一〇%である)。

「昭和一五年の二月一日(当時の紀元節)を期して枕冊子を専

門に研究しよう」とあるように、田中は昭和一五年二月一日（数え年二四歳）を自らの枕草子研究の始発として（日付に対する）、後々までこだわりをもっていた。「自伝を含めた身辺の諸事をまとめた随筆集」と紹介された『枕冊子三十五年』（笠間選書、昭和五〇年一〇月）や「松風学会誌」（創刊号、昭和四七年九月）に載る「枕冊子四十年」などに述べる。

『枕草子の精神と釈義』（旺文社、一九四三（昭和一八）年七月）は、戦前に出された。久松潜一・宇野哲人監修により「現代青年に古典に対する明確な教養を与えるべく、一流専門家に委嘱して教養・学習の両面より古典精神と釈義に就いて極めて平易に而も興味深く解説した」（同書末の広告文）叢書のひとつとして出され、当時作品別では『古事記』（武田祐吉）、『万葉集』（森本治吉）、『奥の細道』（飯野哲二）などが既刊されており、『源氏物語』（土佐日記）『徒然草』『平家物語』などの続刊が予定されていた。『枕草子』に関する田中の処女出版と言つてよい著書である。時に二七歳であった。「二冊の本『枕草子の精神と釈義』（『敬愛』（相愛学園図書館報）第七号、一九七八（昭和五三）年一二月、昭和六二年六月三〇日）に行われた相愛大学人文学部主催の「追悼法要」の小冊子などに再録される）の中で、田中自身が「うれしかった。ありがたかった。この本を書きあげた感激は、本書の「はしがき」に綿綿と書いている。定価二円で、5,000部印刷されたこの本は、戦災で大半を焼かれてしまい、その後35年の歳月がその冊数をより少くしてしまつたが、さいわいわたくしの手もとに数冊ある。目次から語句索引にいたるまで、心をこめ、はりきつて書いたこの「一冊の本」

には無限の思い出があり、わたくしの生命がある」と述べている。その「はしがき」（昭和十七年八月三十日）の日付が記される）に次のような文章がみえる。

商業学校四年生になつた春（昭和八年四月）、早稲田大学の「文学講義」をとり出したが、五十嵐力博士の『枕の草子評釈』には異常な興味をもつた。勿論、その講義のすばらしさにもよつたのであるが、枕草子がたまらなく好きになつて来たのである。商業学校在学中から国語科教員の検定試験を受ける準備を進めてゐたので、卒業までにこの草子を二回位通読したのであらうか、読むたびに、その着想、筆致の奇警、簡勁なのに感じ入つた。その後平安朝の他の作品も、又他の時代の主な文学作品をも一応目だけは通したが、やはりこの草子は他に類のないものだと思ふ氣持が強くなるばかりであつた。

昭和十四年十月、私の受験勉強時代は、ともかくも終を告げた。当時、その後の研学方針についていろいろ迷ひ悩んだのであるが、結局宿望の、国語（平安時代）語彙語法の研究を生涯のはかりごととしようと決心した。そして、その第一の対象を好きな枕草子に選んでみた。かくて、翌十五年紀元の佳節、「清少納言枕冊子総索引」本文篇編纂の事業に着手して以来、私の毎日の生活は、昼夜の授業に追はれつつも遂にこの草子と一日も離れられぬものとなつてしまつたのである。

五十嵐力講述『枕の草子選釈』（早稲田大学出版部蔵版）が、田中の旧蔵書（表紙と目次の二箇所「春曙庵主」の朱印が押される）として相愛大学図書館に現蔵される。『枕草子の精神と釈義』

「はしがき」には「枕の草子評釈」と引かれ、書名に「評釈」とあるが、この書のことであろう。「はしがき」にある（『枕草子』を）「読むたびに、その着想、筆致の奇警、簡勁なのに感じ入った」という同様の表現が、五十嵐力博士の『枕の草子選釈』に「『枕の草子』の特色は、ざつと挙げると、観察の奇警なる事、文章の簡勁なる事、印象的なる事等である」とみえる。

『枕冊子二十年』（一九六〇〈昭和三五〉年五月）は田中自ら「昭和三十五年五月二十九日に開かれる、わたくしの『校本枕冊子』（上・下・附巻）の完成と学位取得とを祝ふ会に御出席くださる方々と、遠方その他の御都合でその会に御出席になれず、記念品代をお寄せくださる人人などにお贈りいたしたく編んだもの」であるが、ここにも、次のようにある。

わたくしが、清少納言枕冊子について専門的なしごとをはじめましたのは、昭和十五年二月十一日であります。その年一月から源氏物語総索引を志して、吉沢義則・池田亀鑑両博士のおしごとと抵触したため、この日（当時の紀元節）午後六時から春曙抄（岩波文庫）の全語索引カードを採りはじめたと当時の日記に記してあります。（中略）かくて、その後は枕冊子本文資料の蒐集と校合とに明け暮れ、「校本枕冊子」の序・跋にしるした多くの人人の御恩によって、本文編は進捗し、昭和十八年春には一往完成しましたが、やがて主底本を春曙抄にすることの非を悟り、これにはるに伝能因所持本系統の善本を主底本に選び、それに三卷本系統・前田家本系統・堺本系統の本文を表示し、改稿三度、校異採択の本を加へてまわりました。

『枕草子』の本質』『月刊国語教育』（一九八三〈昭和五八〉年一二月号）に「昭和一五年二月一日から清少納言の『枕草子』の研究をライフワークとしよう」と志したと記す。かくして田中はライフワーク『枕草子』研究に取り組むことになったのである。

二、『校本枕冊子』―枕草子研究①

『校本枕冊子』は、上巻・下巻、附巻からなっており、さらに総索引第一部・第二部の全五巻である。上巻の刊行は一九五三（昭和二八）年のことであった。池田亀鑑の序に「田中重太郎氏の『校本枕冊子』が完成しました。国文学会の慶事であります」と書き出されている。下巻は一九五六（昭和三一）年三月刊。この間、校本の編纂室として借りていた休務寺が類焼の厄にあい、資料の大半と原稿を失っている。「下巻末に」に記された文から田中の苦悩が知られる。「経験した人でないとわからない、つらさ、かなしさ」と書いている。さらに挫けず何とか完成させようと努力していた同じ八月三〇日の朝、咯血。病に倒れ療養所に入院した。「下巻末に」は「多くの人人のおなさげによって校本枕冊子につくられたのであります。ありがとうございます」と結ばれている。同じく附巻は一九五七（昭和三二）年、その後に総索引第一部（一九六九〈昭和四四〉年）、同第二部（一九七四〈昭和四九〉年）が刊行。この業績こそが、多くの著作のある中でも、田中の学問の大きな柱をなすと言つてさしつかえないであろう。

田中が校本の作成を志した経緯をまずは田中著『枕冊子研究』

(一九五二〔昭和二七〕年一〇月)「序にかへて」から見てみたい。

清少納言枕冊子の諸本に 1 伝能因所持本系統本 2 三卷本(安貞二年奥書本)系統本 3 前田家本 4 堺本系統本の四種があることは、今日学界人の周知せられるところである。この分類は、池田亀鑑博士によつてはじめて行はれ、以後これによるのが常識となつてゐる。そして、それは現存諸本を通覧するとき、もつとも妥当な分類と考へられるものである。

ところで、この四つの系統本中われわれが諸種の研究資料に引用し、あるいは利用する本文はどの系統本をもつて第一とすべきであらうか。枕冊子を読むのには、どの系統本によるのがよいであらうか。

かうした質問をつねにうけるのである。そして、それはもつともなことである。いまから十数年前、もつとはつきりいへば、昭和十五年二月十一日からわたくしが枕冊子語彙総索引のカードを採りはじめたときには、岩波文庫所収の春曙抄本によつて作業したのであつた。が、満六箇月懸命に努力してその三分の一近く進んだとき、その本文の信憑性にぐらつきを感じた。文庫本の誤植は木版本によつて訂正しつつ進めたが、春曙抄本文そのものに対する不安は、わたくしに作業を中絶せしめたのである。それは、これを三卷本系統本としてその当時活字刊行せられてゐた藤村作博士編「清少納言枕草子」(至文堂刊)その他によつて疑問箇所をちよつとあたるだけでも春曙抄本文に疑惑をおぼえるところが多かつたからである。春曙抄本文に

よつてゐる国語辞書の誤とおぼしきものがつきからつきへと出て来たからである。そのため、わたくしはそのカードを全部捨てた。そして、その年十月から索引の本文にかがづらひはじめた。そして、十二年を経た。荏苒日を送つてまだ十分な校本文篇を出版し得ないのである。はづかしいことであるが、これにはやむを得ない種々の事情があるのである。いま、そのことはここで述べない。ここには、春曙抄本文の信じがたいことをおぼえ、カード採集を中止したことをいひたいのである。(中略)

しかし、一般における春曙抄本文に対する信頼性はいまだ強くつづいた。そして、金子元臣氏の評釈や通解が定評ある註釈書としてひろく通行せられてゐることも手伝つて、教科用テキストとして現在でもこの系統の本文を採るものがすくなくない。たとへば、昭和二十六年十一月刊岡一男・村井順両氏の「枕草子」(学燈文庫)の凡例に「底本としては、今日もつとも流布している『枕草子春曙抄』の本文を採つたが、その誤脱を現存する最古の写本前田家本によつて校訂した。また『春曙抄本』について、学界に信頼ある三卷本の異文を設問に出し、比較対照に便した」とあり、昭和二十七年四月刊今泉忠義博士の「枕草子」(新註国文叢書 改訂版)のはしがきに「本書の本文は旧版同様、春曙抄本に拠つた。改訂に方つて本文としては春曙抄本よりも優れた三卷本に拠つたものかとも思つたが、三卷本はまだそれほど一般的でもないらしく、正読本・入学試験問題なども、依然として春曙抄である今日では、再び春曙抄の本文に拠らなければならなかつた」とある現状である。

『枕草子の精神と釈義』（同前）の底本は、三巻本（第一類は宮内省図書寮本、第二類は狩谷図書館本及び岩瀬文庫本）を用いている。同書の釈義篇の凡例に「現存諸本に於いて、一箇の枕草子としてはともかく、少くともその語彙語法の上からみる時、この系統の本文が最も損傷の程度が少く、もとの形態を留めてゐるやうに思はれるからである」などがある。また、同「はしがき」に「池田亀鑑氏はじめ、索引本文篇編纂について、常に御指導御鞭撻をいただいてゐる諸学」ともあり、自らの立場を表明している。

枕冊子語彙索引のカードを採りはじめた田中は岩波文庫所収の春曙抄本によって作業したが、春曙抄本文に多くの不審があり、「そのため、わたくしはそのカードを全部すてた」のである。当時は「一般における春曙抄本文に対する信頼性はいまだ強くつづいた」とあるように『枕草子』を読む場合、春曙抄によっていたのである。田中がまず本文研究に携わらずにおれなかつた事情があつたのである。

さらに田中は「枕草子の解釈の方法―これにこそありけれ」（三巻本「うれしきもの」の解釈―）（『枕草子講座』第三巻、有精堂、一九七五（昭和五〇）年一二月）で、次のように述べて校本の意義や必要を説いている。

平安時代の古典文学のすべてに共通していることの一つに、作者の原文とか自筆本が現存していないことがある。

『清少納言枕草子』の作者のみずから書いたと考えられる『枕草子』の本文は現在までに発見されていないが、将来ももう出て来ないであろう。

古典文学の解釈は作者の原文または自筆本によって行なわれるべきであることはいうまでもない。しかし、その原文がない場合は、後人の写本あるいは、後世の板本（古活字本を含む）などのできるだけ多くを参看校合して、たとえ部分的にでも、あるいは一字一句でも、作者の原文とおぼしき本文にさかのぼることを考え、それにもとづいて解釈すべきであろう。

しばしば引いた例であるが、『枕冊子』の「すさまじきもの」（第三段）の中で現在

牛死にたる牛飼。

と定本化されている本文が昭和二十年前後までは

牛にくみたる牛飼。

の本文で読まれていたのを、筆者は現存伝本の本文の多くを調査参看することにより

うし、にたるうし、にたるうし、にくみたる

と誤まられて来た事実を発見した。そして、「すさまじ」という形容詞のもつ意味は

当然あるべきものがない。備わるべき条件が備わっていない。

期待はずれである。季節はずれである。などハズレテイルことに対する興味索然たる気持を述べるのであるから、

牛にくみたる牛飼。

の誤謬本文によってむりな解釈や鑑賞をするよりも、水上にあがつた河童とか自動車のない運転手とかのように当然その人そのものにあるべきはずのものがなかつたり、欠けているのが「すさまじきもの」なのであるとして、

(商売道具ノ)牛(ガ)死にたる牛飼。

の本文がその意に適し、かつ伝存本文としてより古く、正しい本文と考えられることを証したのである。

こうした本文校訂には校訂者という人間の思考力、解釈力を第一条件とすることはもろろんであるが、その実証にはその本文校訂に必要な材料、つまり諸本の本文を調査することもまたきわめてたいせつである。本文を自己の思いつきや単なる論理的条件だけでつくってはならない。

さて、諸本文を校訂するには、伝存諸本文を対照して参考研究する一覧表がぜひほしい。それは句読点・濁点などをつけず、できるならば漢字草仮名の字体までわかるものでありたいし、章段による改行などをしない写本・板本のままの形態を望むからこれらをコロタイプ・オフセット・写真凸版などに印刷し公刊して研究者に利用してもらえばよいのであるが、一つの作品に対して何十種類の写本・板本のすべての異本の影印本化は困難である。ここに、字体は現行の漢字・かなとし、章段などを切った『校本』が編まれることになる。『枕草子』の場合には、小著『校本枕冊子』(三巻)は便宜的な校本であるが、本文の語句異同等はこれを利用することによってまずまずたしかめ得るであろう。ことに『校本枕冊子』の底本である伝能因本文文についての総語彙は『校本枕冊子総索引』第一部によって調査できるし、『枕冊子』の三巻本・前田本・堺本の各系統本文における自立語はすべてこれを品詞別に『校本枕冊子総索引』第二部にこれを収めたので、『清少納言枕冊子』の総語彙

は『校本枕冊子』全五巻に収録されているから用例検索などには事欠かないようである。

自分の著書の宣伝になるが、『枕草子』の解釈には、まず校本を用意する必要を説いたのである。

刊行当時から、『校本枕冊子』は学界において高く評価された。いま書評を引いてみる。まず岸上慎二「田中重太郎氏編著『校本枕冊子』」(『国語と国文学』一九五六(和三一)年一月号)に次のようにみえる。

池田博士の「文献学的国文学の方法は、徹底的に客観主義を推し進めてゆかなければならない。云々」といふ態度のとられていることは勿論のことである。すると、収載諸本が幅広くゆきわたり、質においても優秀なものが多量に集められていることが、もつとも望ましい。これにはいろいろの事情もあつて、例へば所蔵者の承諾をえられぬとか、すべてを網羅することは、なかなかむづかしい。ところが、この田中氏の校本枕冊子は、今日までに発見報告せられた、殆んどいつてよいくらいの諸本が収められてをり(中略)その点、これ以上は今日望めさうもないくらいであることが第一の特色といへよう。(中略)「使い易く、親しみ易い校本」といふ目的をもつて(中略)一目瞭然と、その本文関係が諒解せられる。(中略)嘗て、大正十五年四月春季特別号の、国語と国文学の誌上において、和辻哲郎博士から「(中略)本文批評の現状は甚だ自分にあきらない」云々(中略)とお叱りを受けた事があつた。このお灸は、昭和に入つての枕草子の本文批判の劃期的前進を呼び起す

原動力となつたといつてよく、枕草子の本文研究史上、とくに忘れぬ事柄である。池田博士の（中略）論文により（中略）四系統説が確立（中略）こういう下地が築かれつゝあつたところに、田中氏の研究がはじまり……

「池田博士の（中略）論文により（中略）四系統説が確立（中略）こういう下地が築かれつゝあつた」などであり、後述のように、田中の業績は、それまでの研究、とりわけ池田亀鑑の研究を引き継いでいる。また、楠道隆「田中重太郎氏編著『校本枕冊子』」（『文学』一九五八（昭和三三）年三月）は「計六五六頁の大冊である。量もさりながら、この内容の豊富さ、まったく期待以上である。必要以上である。見れば見るほどたいへんな本である。（中略）学歴の上からも、経済的にも、肉体的にもわたしよりは不利である立場の田中氏がやったのだからわたしの驚歎は大きい。（中略）校本をつくる事がどんなに困難な事か……（中略）誠意があればこそ氏にすべての人は力したと言える」などと驚歎の言葉を連ね、次のように評する。

底本を伝能因本にした事についていろいろ誤解もおこつたらしく（中略）次に校本の形式であるが、別欄校異羅列式と圈点式対校形式のうち、後者を採用された事（中略）一目瞭然であるからとても便利である。だが同時に本文の読み方次第でどのようなにも対校できる面ができて、著者の読みを強制する事になる。（中略）註釈の上でもゆき届いた研究をつゞけて居られるため、危険は可能な限り予防されている（中略）（諸本解説について）すこぶる控え目にしか書いておられない。本と人に

対して礼儀を重んずる立場をとられたからであろう。礼儀よりも批評の方を大切に考える立ち場とのちがいであるが、礼儀を大切にしながらこそ、この種の仕事のできたのであるとも言えて、わたしの注文は無理過ぎるようである。

前述の岸上慎二の書評の引用冒頭に、池田博士の「文献学的国文学の方法は……」とある池田博士は池田亀鑑のことであり、同じ書評からもうかがえるように、田中の校本は池田の「枕草子」研究をふまえ、さらにその文献学的方法を継承している。久松潜一「池田博士と文献学」（『国語と国文学』追悼号、一九五七（昭和三二年二月号））によって池田の学問を略述すれば、「文献学といふ学問の性格に於ては上田博士や芳賀博士が独逸のフィロロギイを移入して、これを文献学と名づけられ、その立場から近世の国学を日本文献学とされた。池田氏はその立場からはじめは文献学を扱つて居られたが、次第にそれとは異なる学問的性格を文献学に与へられてゐる」とあり、また、古代学としての文献学は対象性と方法性とは分離してゆくに至り、「佐佐木信綱博士の文献学に於てすでにさういふ傾向が見られるが池田氏の文献学も方法としての文献学が中心になつて来たのである。この点は日本に於てのみならず欧州に於てもベイクやエルツエの文献学が次第に対象としての文化学から分離して方法学としての文献学が行はれて来たことは池田氏もラッハマンの説などを挙げて説いてゐる」。要するに「ベイク等の文献学によりながら次第に古代文化学的な性質を離れて文献そのものを対象とする文献学に移行したのであるが、それは土佐日記の本文批評を詳細に扱つた「古典の批判的処置に関する研究」（昭和十六年）に至

つてその点をはつきりされたと思われ、「文献学的研究の諸段階の中でどの段階に文献学的研究の中心をおかれていたかといふに、本文批評、即ち古典の批判的処置に文献学の主要な任務をおかれてゐた。基礎的研究と言つても書誌学的段階に中心をおく立場や、注釈的方向に中心をおく立場があるが、池田氏は本文批評的研究に文献学の中心をおかれたやうである」。近世国文学の伝統をふまえて、「上田博士」（上田萬年、一八六七（慶応三）年～一九三七（昭和一二）年）、「芳賀博士」（芳賀矢一、一八六七（慶応三）年～一九二七（昭和二）年）の移入したドイツ文献学の理論と方法を引き継ぎ、日本の古典文学の基礎研究としての本文批評的研究を確立したのである。

池田と田中の交誼は『校本枕冊子』の巻頭に掲載される池田が著した序文の存在から知られるのであるが、ここでは校本に関わり、田中宛の池田亀鑑の書簡一通を紹介する。

中沢書店古書目録『中沢』15号（平成一一年）に写真が載る書簡である。同日録には「一通十万円 昭和27年（55歳）頃 ペン『桃園文庫用箋』6枚62行完 田中重太郎宛 保存良 封筒共『校本枕冊子』の序文依頼に対する返書か『源氏物語大成』刊行間近の昂揚感を窺わせる好書簡」、封筒宛先は「京都市中京区西之京中保町五五 田中重太郎様 侍史」とある。以下、同日録掲載の写真より引用。6枚のうち2枚が載る。

お手紙ありがたく拝見いたしました。御病人がおりでした由皆様早く御本復のほど祈つてをります。お互ひに生きるため

に心にもない仕事をしなければならぬことです。しかし、田中兄、お互ひに本道だけは見誤らないでませう。「校異枕冊子」これはあなたを措いて誰がなしうるでせう。ぜひやりとげて下さい。世俗的な名聲、それが何ですか。一切のアプレゲールを私は斥けたい。大兄の仕事を助手以下の仕事とする徒輩は、その助手にさへなれぬ代物です。古活字本をもととする考へ方は、なぜ古活字本の原流をきはめぬのか。高野本、富岡本（大兄御存）（以上一枚め）

ぜひ序文をかかせていただきます。地位などに恋々としてゐる中に、光陰は去つて行きます。御自愛下さい。切に切に御自愛下さい。富岡本によつて高野本の上巻が大体補はれますから、この機会に「校異本」に大馬力をかけて下さい。

近ごろ小生の腰折、御笑覧に供します。

数ならぬ身にはあれどもこの一事なしとげずしていかで死すべき

田中学兄 二月三日 亀鑑記

二伸 かねて御配慮をいたゞいてゐました陽明文庫の件、当分見せていたゞけさうもありませんからまこと

池田亀鑑は『土左日記』の貫之自筆本の探求を実践例として『古典の批判的処置に関する研究』（岩波書店、一九四一年）において、その文献学的理論と方法を確立した。そして、『源氏物語大成』（中央公論社、一九五三年～五六年）として成果を突らせた。『源氏

物語』における池田の業績にならうが如く、田中の『枕草子』の校
本作成は評価されうると考えられる。

『校本枕冊子』は、原稿の焼失という災厄や病気など様々な困難
を乗り越え多くの人の協力があつて出版された。発行者は吉田幸
一、発行所は古典文庫である。たくさんの理解者の支援に田中は謝
辞を惜しまない。校本完成に至る詳細な経緯は本論の趣旨とはいさ
さか外れるので省略するが、校本の仕事が個人で成し遂げられる性
質のものではないことは、他の校本の例、『校本万葉集』や『源氏
物語大成』などをあげるまでもなく、明らかである。添付された田
中の文章（序や跋など）にみえる多くの人々への謝辞は『校本枕冊
子』が共同研究であることをいみじくも示唆していると思われる。
なかでも吉田幸一に対しては田中自身も特別な思いがあつたであ
らう。

上巻の序（池田龜鑑筆）に「猶、氏の大業を完成させる為に終始
一貫変らぬ至誠と友情を捧げた学者として、吉田幸一氏を紹介しそ
の功を讃へることを許されたいと思ひます。田中氏に寄せられた友
情といふものは普通の「友情」の概念をはるかに超えて、天上の愛
を思はせるものがあります。もし吉田氏の涙ぐましい援助がなかつ
たならば、恐らく今日の田中氏の偉業は、中途挫折してゐたかもし
れません。まことに学界稀にきく美談であります」とみえ、同じく
自序にも「本書の成るに当つて生みの親とも申すべき恩人が二人あ
る。池田龜鑑博士と吉田幸一氏である。（中略）池田博士はいつか
「吉田さんはあなたの本を作りに生まれて来られた人のやうですね」
といわれたことがあつたが、本書の編纂刊行についても、あるいは

資料についても吉田氏の尽して下さつた恩恵は実に深く大きい。わ
たくしはなんといつてお礼してよいやらわからない」という。前述
の「下巻末に」の文章には、「とりわけて、吉田幸一氏には、こと
ばでは尽くせぬ、かずかずの、そしてきはめて深い恩恵にあづかつ
た」とあり、具体的な「吉田氏のおかげ」を記している^{*}。総索引第
I部の「跋」にも次のようにある。

吉田博士には、「校本枕冊子」刊行以前から公私ともになみ
なみならぬお世話になつて来たが、校本文篇三冊作成にあた
つて多くの御蔵書の恩借、それを火災によつて損壊したわたくし
へのありがたい御宥恕、そのうへ病気でたふれたわたくしへ
の献身的な御援助などその他筆舌に尽くし難い御恩にあづかつ
て来た。この総索引の刊行についても期日のことその他で御迷
惑をかけて来たが、ここに「校本枕冊子」全五巻を刊行するに
あたつて博士の親身もおよばぬ御慈愛に対して心から感謝申し
あげる次第である。

三、『枕冊子全注釈』―枕草子研究②

『枕冊子全注釈』の第一巻（五五〇ページ、全四巻の予定であつ
た）が出版されたのは、一九七二（昭和四七）年二月のことであ
る。角川書店の日本古典評釈全注釈叢書のひとつとして（第十七回
配本として）出されている。田中にとっては、日本古典全書『枕冊
子』（朝日新聞社、一九四七（昭和二二）年）などに続く、『枕草
子』全本文の校注であつた。日本古典全書が『枕草子』四系統のう

ち、「三巻本」を底本にしているのに対して、当該全注釈は「能因本」を底本にしている（主底本は三条西家旧蔵学習院大学国文学研究室蔵本）。

凡例には「本文」「校異」「通釈」「語釈」「補説」「評」「挿図・写真・地図」「索引」「参照文献略号」の九項目がある。たとえば「語釈」には次のようにある。

語句の意味について、できるだけ詳しく説こうとしたが、自分の学力に限度があつて簡略にしたところもある。しかし、能因本文の『枕冊子』の全注釈として、本書は最初のものであると同時に、『枕冊子』の語彙注釈として本書はもっとも詳しいものでありたいと念じて執筆したことを申し上げておく。結論だけでなく、その用例をあげ、できるだけ博搜し、詳しく引用したが、その場合、単行本及びそれに準ずるものは「」、研究論文には「」を付して識別を容易にした。なお「語釈」に説ききれないときは、**補説**あるいは**評**の中で解釈したところもかなりある。

この凡例の前に序説と「能因本枕冊子について」がある。後者に自著『枕冊子』伝本研究の現段階（『月刊文法』昭和四六年二月号）を引いて、能因本を底本に用いた意図を説明する。前者には『枕冊子』の注釈研究史や当該全注釈の執筆経緯が述べられている。そこに次のようにある。

本書全巻の礎稿は、十数年前に森本茂氏におねがいで、三分の二以上は、つとに完成していた。その礎稿は本文と通釈と語釈とであったが、わたくしはこれを原稿化するために本文を

さらに校訂し、そのあとに「校異」を新しく加え、「通釈」に手を入れ、さらに「語釈」の礎稿に対して、その数倍、ときに十倍以上も書き加えてできるだけ諸説を引き、また、わが説を多く開陳して「評」「補説」とした。（中略）しかし、美しい文字で書かれた、魅力的な、森本氏の礎稿がなかったら本書の執筆はさらにおくれたことであろう。ここにしるして森本茂氏にあつく御礼申しあげる次第である。

次いで「本書の礎稿には旧著『枕冊子新釈』（昭和二十八年六月要書房刊）をも用いた。この書はあまり普及していないが、本文の底本を能因所持本系統の三条西家旧蔵本に採り、六十五章を選び、本文、語釈、通釈、評にわけて略説したものである」とある。序説を読み通すと、それまでの本文研究や注釈活動を集成する意気込みが見て取れる*。

その注釈姿勢について、「うへにさぶらふ御ねこは（第七段）」を例にして以下に考察したい。『枕冊子大事典』（勉誠出版、二〇〇一年）の主要章段解説「うへにさぶらふ御ねこは（第七段）」により【章段の内容略説】を参照に引く。ほぼ次のような筋立てである。以下、便宜改行して引用。

① 従五位下を賜り殿上を聴されている「命婦のおと」という一条天皇寵愛の御猫が昼寝していたのを、「翁丸」という犬が威嚇する。

② 翁丸は天皇の命を受けた蔵人たちによって捕獲され、「大鳥」へ追放される。

③ 三、四日後、翁丸が逃げ帰り蔵人たちに打擲されて死んだと

の一報が中宮方に入る。

④夕方、中宮の御所にひどく腫れて苦しそうに歩く犬が現れるが、翁丸ではないとの判断に到る。

⑤翠朝、その犬が翁丸を哀れむ清少納言の言葉に身を震わせて涙を流し、翁丸と判明する。

⑥翁丸は、勅勘が解けて元の身の上に復帰する。翁丸と人間たちの感情の動きや行動を実に巧妙かつリアルに描ききるとともに、犬にも人間的感情を発見して人との交流を感動的に回想して章段を締め括っている。

このうち、⑤の部分の本文は次の通り。便宜に新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館、一九九七（平成九）年）による*。

暗うなりて、物食はせたれど、食はねば、あらぬものと言ひなしてやみぬるつとめて、御けづり髪、御手水などまゐりて、御鏡を持たせさせたまひて御覽すれば、げに、犬の柱のもとに居たるを見やりて、「あはれ昨日翁まるをいみじうも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。何の身に、このたびはなりぬらむ。いかにわびしき心地しけむ」とうち言ふに、この居たる犬のふるひわななきて、涙をただ落しに落すに、いとあさましきは、翁まるにこそはありけれ。「昨夜は隠れしのびてあるなりけり」と、あはれにそへて、をかしきこと限りなし。御鏡うち置きて、「さは、翁まろか」とい言ふに、ひれ伏して、いみじう鳴く。御前にもいみじうおち笑はせたまふ。右近内侍召して、「かくなむ」と仰せらるれば、笑ひののしるを、上にも聞しめして、わたりおはしましたり。「あさましう、犬なども、

かかる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。上の女房なども、聞きて、まゐりあつまりて、呼ぶにも、いまぞ立ち動く。「なほこの顔などの腫れたる、物のてをせさせばや」と言へば、「つひにこれを言ひあらはしつること」など笑ふに、忠隆聞きて、台盤所の方より、「さとにや侍らむ。かれ見はべらむ」と言ひたれば、「あなゆゆし。さらにさるものなし」と言はずれば、「さりとも、見つくるをりも侍らむ。さのみもえ隠させたまはじ」と言ふ。

波線部（稿者）の「御前にもいみじうおち笑はせたまふ」をめぐって、『枕草子全注釈』の語釈から引く。

○おち笑はせたまふ 現存する信ずべき本（三卷本・能因本古写本）は、すべて「おち……」とあるが、「おち」の意がはっきりしない。「怖ぢ」でびっくりする意か、「落ち」で了解する・納得する意か、「腑におつ」の「おつ」か、断定し難い。従来は「うち」に改めた本文によつて解釈しているが、その改める根拠はないのである。しばらく、「怖ぢ」と考え、「皇后様も（犬でもこわいものだと）びっくりされて」と解しておく。池田亀鑑氏は、「おち……」の「お」は、もと「を」（「乎」の草仮名）と表記されていたが、それはもと「う」（「字」を字原とする草仮名）であったのだと推考し、「うち笑はせたまふ」を原型とみとむべきであろう（『評釈』（余釈）と説かれた。しかし、これでは、現存古写本類の「おち……」を全面的に否定したことになり、私には承服し難いものをおぼえる。この冊子に「怖ぢさわぐ」の例があり、『源氏物語』に「怖ぢ

困じて」(野分)、「怖ぢさわけば」(少女)、「枕冊子」前田本・堺本に「怖ぢわななく」、「宇治拾遺物語」に「怖ぢ恐る」の例があるが、「おぢ……」に複合する動詞は「さわぐ」「困ず」「わななく」「おそる」など、すべて意味の上で「怖ぢ」に關係のある動詞であつて、「笑ふ」のように平和で明るいものでない点、「怖ぢ笑ふ」説に不利である。林和比古氏の『枕草子新解』には、「皇后が突然犬がはげしく泣き出したので、肝がつぶれ恐ろしくなり、やがて可憐なものと思われて笑い出された」の意味に解する。この心理過程は清少と同じで、清少も初めは「涙をただおとしにおとす、いとあさまし」であり、(これが皇后の「怖ぢ」に当り)次いで「あはれにてをかしきことかぎりなし」となる。(これが皇后の「笑はせ」に当る)とその心理過程をうがっておられるが、あまり考え過ぎのようである。萩谷朴氏は、この「おち」——「ち」を濁らない——は「落ち居る」「落ち着く」のオチと同じく、他の動詞と重なつて複合動詞を形成するもので、「いみじう落ち笑はせ給ふ」(田中注・三卷本本文によつておられる)は、「たいへん安心してお笑いになる」と訳すべきものである」(萩谷朴『国文学』昭和三十四年十一月号「枕草子解釈の諸問題(十四)」)、のちに『枕草子必携』所収「枕草子語彙辞典」と説かれた。一説であるが、定説とは言い難い。

こうした解釈の態度に就いて、田中「枕草子の解釈の方法」(同前)は、次のように説明している。

さて、枕草子の解釈の方法について説くことはいろいろある

であろうが、その解釈はすべて本文にもとづいてなされるものであるから本文を読むことから解釈がはじまることはいうまでもあるまい。その本文が読解できなかったり、疑義が生じたとき、現存本文を疑つてその諸本文の該当箇所に見解によつて誤写を考え、正当と思われる本文を再現させることも大いに必要である。従来紹介されている本文をいくら比較してみても、意が通じない、不明の箇所については、文字の誤写誤読その他から生じたゆえんを説き、そのなぞを解き明かす方法である。

諸本文を客観的に比較し、その本あるいは、その本の系統のもつ価値から、あるいは、用例を博搜して文法などの学に照らしてきわめて消極的に正しさを主張する解釈法がある。わたくしは、この方法で『枕草子』の解釈をながい間して来た。その成果は小著『枕冊子研究』(昭和二七年刊)『枕冊子本文の研究』(昭和三五年刊)『清少納言枕冊子研究』(昭和四六年刊)などに大半を収録してあるが、それらは本文比較・用例検索を主としていて論者の主体性というか、根本的な誤写誤読を主張しているものが少ない。これは、わたくしの弱い性格が主因であるが、やはり思いきつた考えが出せないという解釈力の不足であり、すべてに力がないからであろう。

この後、同「枕草子の解釈の方法」によれば、「わたくしとおなじように本文批判はじゅうぶんさざるが、わたくしと対照的に主体性のある独自の解釈を『枕草子』の本文になさるのが萩谷朴氏である。その具体的な例は、主として「枕草子解釈の諸問題」(1-63)

〔国文学〕昭和三十三年十月号、昭和三十九年十二月号に精細に説かれていて、まことに卓見が多く有益なものであるが、これらを踏まえて「枕草子語彙辞典」（岸上慎二博士編『枕草子必携』学燈社刊所収）にそのいくつかを説述していられるので、そのうちの一つをご紹介してみると、『枕草子』の中の記事として有名な翁丸の段の難解箇所「おちわらふ」という動詞について、こんな解説がある」として萩谷説を引用する。いま、文中の萩谷説を後に決定版として萩谷自身がまとめた『枕草子解環一』（同朋社出版、一九八一（昭和五六）年）から確認する。なお稿者注を追記した。

▼問題点(八)いみじうおちわらはせ給ふ

(各系統間の本文異同)

(a)三卷本「いみじうおちわらはせ給ふ」

(b)能因本「おちわらはせ給ふ」

(c)流布本「うちわらはせ給ふ」

本来、(a)三卷本と(b)能因本との間には、動詞オチワラフに關して対立異文は存在しないのかかわらず、三卷本の諸注には、流布本(b)本文によって改訂した、

(A)朗らかに可笑いあそばされる「評釈（＝塩田良平『枕草子評釈』昭和三〇年、学生社、稿者注）

があり、また本文を改訂はしないが、流布本(b)本文による解釈に牽制された、

(A)たいそう笑われる「全講（＝池田亀鑑『全講枕草子』昭和

三十一年、至文堂、稿者注）

や、「おち」を「怖ぢ」の意にとる、

(B)びっくりしてお笑いになる「旺文（＝田中重太郎『枕草子』

昭和四八・四九年、旺文社文庫、稿者注）

などがあつたが、いずれも落ち着かない。

元来これは、「う（字母字）」と「を（字母乎）」との字形相似、更に「を」と「お」との音韻相通を契機として生じた本文転化であるうが、「おちわらはせ給ふ」とある三卷本文に從う限りは、(B)解の「怖ぢ笑ふ」という矛盾した感情の同時混在は認められない。既に、諸問題(14)（昭和34年11月）に詳述したことであるが、対照法解釈の心理的規準を適用して考えると、清少納言は、犬に話しかけ犬を観察し、その正体を見現わした当事者であるから、一たんは「あさまし」と驚き、ついで、「あはれ」とも「をかし」とも思うに到つた心理の反応起伏を、その生起した時間を逐うて、次々に叙述する必要があつたのであるが、その最終段階についてのみ反応を指摘されている第三者としての中宮の心理を、清少納言の心情変化と時間的に並行せしめて、まず「怖ぢ（給ひ）」、しかる後「笑はせ給ふ」と平仄と合わせて叙述する必要はない。しかも、「いみじう怖ぢ給ひ笑はせ給ふ」とでもあればともかく、「怖づ」と「笑ふ」と、前提条件も異なり、時間的にも間隔の必要な別個の動作を表わす二個の動詞を、それぞれに助動詞・補助動詞をつけることなく、単に中止形で云いさしにした形で「怖ぢ、笑はせ給ふ」と書き続けることは、語脈的規準よりして認められない。かといって、「怖づ」と「笑ふ」と全く異質で、むしろ矛盾した感情を表わす二つの動詞を直結して「怖ぢ笑ふ」とい

う複合動詞を形成することは、猶更許されない。互いに矛盾した内容を持った二つの動詞を複合させて、時間的に連続して同一条件の下に交互に起きる動作を示す「上がり下がり」、同じく混淆して起きる動作を示す「泣き笑い」、又は、同一時間を占めて、相反する立場にある二者によって対抗的に行なわれる動作を示す「勝ち負け」のような用例は、この場合の旁証とはなり得ない。そこで林新解（『枕草子新解』昭和二八年、邦進社、稿者注）が第二の解として挙げながら、自らこれを斥けた「納得する」意の「腑におつ」の「おち」という説を、更に中宮の心情に適合させて、

(C) すっかり安心してお笑いになる 諸問題(14)・集成（『新潮日本古典集成、昭和五二年、稿者注』）

という新解釈が登場するのである。これは林新解にいう「腑に落つ」のオチのように独立した動詞ではなく、「落ち居る」「落ち着く」のオチで、接頭語のように、他の動詞の上に重なって複合動詞を形成するものである点において、この場合の「落ち笑ふ」の語法と合致するし、気持が落ち着いて自ずと笑いが生じることは、心理的にも時間的にも密接に連動する作用であるから、中止形で二つの動詞を直結させて作った複合動詞として表現することも許される。ただこの場合にも、他に用例がないということ、オチワラフという複合動詞の孤立例の存在を疑う用例主義が抵抗を示すが、前にも述べたように、一定の限られた言語体験を持った古典作者のあまり高くない語彙採取率と、伝存文献に加えられる厳しい伝承過程の自然淘汰、転々書

写の間における頻繁な本文の汚染と、語彙文法の近代的転化と、用例発見を阻むこれらの悪条件の相乗作用を考えるならば、用例による挙証という物的証明は、決して絶対的な条件ではあるまい。緻密で厳正な状況証拠が十分に有効なのである。このような萩谷説をふまえ、同「枕草子の解釈の方法」は次のように続けている。

以上の萩谷説に満足するか、否かは読者がきめればよいことであるが、わたくしは『枕冊子全注釈』（一）の中で、これを引いて、「一説であるが、定説とは言い難い」とした。もちろん、萩谷氏もこの所説を定説といわれるお気持でなく、従来の「うちわらふ」になおす説や「怖ぢぢわらふ」説（林和比古博士の『枕草子新解』に見える説で、「皇后が突然犬がはげしく泣き出したので、肝がつぶれ恐ろしくなり、やがて可憐なものよと思われて笑い出された」のが「怖ぢ」だという）の不当を説いてこれらをしりぞけられ、「おちわらふ」の「ち」は濁らないで、「落ち居る」「落ち着く」のオチとおなじで「おちわらふ」を安心して笑う意に解されるという一説をお出しになったのであろう。

しかし、わたくしには「おちわらふ」を「落ち笑ふ」とし、この「おち」は「落ち居る」「落ち着く」のオチとおなじく、他の動詞と重なって複合動詞を形成するものであるからというだけで「おちわらふ」がそのまま「安心して笑う」意になる過程がわからないのである。他に「おち笑ふ」の用例が一つでもあり、それに心ガオチツイテ笑ウ意があれば別であるが、そ

の用例もなく——わたくしのさがしたところでは、平安時代の作品にはこの複合語の用例は他になく、最近刊の『岩波古語辞典』『日本国語大辞典』にも「おちわらふ」「おぢわらふ」の項目解説がない——「おち」の用例用法をも深く調べたしかめないでその結論にもつていく勇氣がない。

『枕冊子全注釈』にも引いておいたようにこの「おち」は現存する信すべき諸本（三巻本・能因本古写本）にはすべて「おち」とあるが、それでは意がおちつかないため、江戸時代から根拠もなく「うち」に改められて来た。池田亀鑑博士は「おち」の「お」は、もと「を」（「乎」を字原とする草仮名）と表記されていたが、それはもと「う」（「字」を字原とする草仮名）であったのだと推考し、「うち」とあるのが原型とみとむべきであろう（『清少納言枕草子評訳』池田亀鑑選集『随筆文学』所収）といわれるが、これも一仮説に過ぎない。

「おつ」は「落つ」で了解する・納得する・腑におつ意かと考えられるが、そうした用例は近世にしかない。決まる・落着する意の用例として、「かく人の推し量る案におつることもあらましかば」（『源氏物語』藤袴）の例などもあるが、この「おつ」には遠いようである。所詮、用例待ち、でわたくしは終るのである。

さらに結論として「本文を比較しても、他の用例用法をさがしもとめ、考えても何も出て来ない。そこで終つていては主体性のある解釈学は成立しないであろう。しかし、『枕草子』の解釈の姿勢として、わたくしはその基礎資料の本文を調べ過ぎたせいもあつて

か、つねに文献どまりである。萩谷氏のように積極的に自分の思考を出せる人がうらやましい次第である」という。田中の研究態度を明瞭に示している。ここに示したのは一例であるが、田中と萩谷の注釈姿勢の差異が見て取れる。言い換えれば、萩谷との相違はみごとに田中の学問を浮きあがらせていると思われるのである*。

おわりに

『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九〔平成一一〕年）の項目「田中重太郎」（蔵書・蔵書家）に次のようにある。執筆は故柿谷雄三相愛女子短期大学名誉教授（二〇一二〔平成二四〕年七月没）。

近代の国語国文学者。蔵書家。大正六年京都市生れ、昭和六十二年急逝、七十歳。父室山倉太郎・母チユウ。生後すぐ叔母ふじの田中家を嗣ぐ。昭和十四年、高等教員国語科検定試験合格。立命館大学予科教授、相愛女子短期大学教授を経て、同五十九年相愛大学人文学部教授。『枕草子』の文献学的研究に没頭し、流布本『春曙抄』本文の数々の誤りをただし、三巻本善本説を唱えた。校本、総索引、全注釈等を刊行し、享受文献の研究、各伝本の校注書等を発表した。(1)『枕草子』、(2)『徒然草』、(3)『百人一首』をはじめ多くの写本・版本の集書が知られており、(1)を中心とした春曙文庫が相愛大学相愛女子短期大学図書館に所蔵されている。「春曙庵主」の蔵書印が蔵書の一部に残る。

現在、相愛大学には、「枕草子」の冒頭「春はあけぼの、やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」の一節に因み命名された特殊文庫、「春曙文庫」がある。その名が示すように清少納言『枕草子』関係の諸資料がそろふ。伝本の数々をはじめ、注釈書類、影響文献に至るまで、「枕草子」に関する研究にその場ですぐに取りかかることができるようになり、全国に誇れる文庫と言える。

「春曙文庫」は、一九八八（昭和六三）年本学の創立百周年の記念事業の一環として設立された。その前年に亡くなった田中重太郎が収集し愛蔵していた多くの貴重書が預託されたのを機会に従来の蔵書も加えて特殊文庫としてまとめられた。学園の英断と、なにより遺族の理解とによるものと思われる。その内、主要な古典籍の展示がその年の一〇月二六日から一月五日まで行われ、『相愛学園創立一〇〇周年記念古典籍資料展示目録』が出されている。その後、一九九三（平成五）年三月には『春曙文庫目録（和装本編）』（ともに本学図書館編）が出版された。当時文庫実行委員代表であった故柿谷雄三名誉教授執筆のあとがきによると「田中重太郎博士の旧蔵書八四三点、今小路覚瑞元学長の旧蔵書五六点、本学図書館所蔵のもの九二点、合計九九一点の略目録である」とある（その後に追加整備されている）。目録作成は本学勤務の国文学専攻の教員や図書館員の方々の整理調査に基づく。こうして一応文庫の基幹が整い、貴重図書資料室（南港）において春秋二度の定期展示などが開催されている。^{*10}

田中は、『枕草子』の文献学的研究に大きな業績を残し、その権威は今も変わりがなく、また膨大な文献蒐集もひろく知られている（前掲『日本古典籍書誌学辞典』）。田中は先の『枕草子』冒頭を愛し、「春曙庵主」の蔵書印を一部蔵書に押ししている。田中学顕彰の意義が「春曙文庫」の呼称には象徴的に現れているのである。

註

*1 「雨海先生」は雨海博洋（あまがいはろよし）。二松学舎大学名誉教授。「下玉利先生」は下玉利百合子。同じく講師。

*2 田中重太郎は饒舌多弁の人といってよいだろう。自らの研究の事のみならず家族などの身辺雑記に及ぶ多くの文章を残している。それらの随想は田中の人生を照らしている。また速筆ぶりも伝わる。「十代、二十代には、一時間に四〇〇字詰原稿用紙に平均十枚近く書いたわたしが、近ごろでは、その半分も書けなくなった。」（「相聞Ⅱ」）「遅筆」、初出は「緑壺」第一四号、一九七七年一〇月。時に田中は六一歳。池田勇「田中重太郎先生の思い出」所収「先生の才能」（『相愛国文』第一号、一九八八（昭和六三）年三月）によれば「はがきの表と裏とを一枚につき、一分以内に書けるかどうか、時間を計ってほしいといわれ、数枚のはがきをそれぞれ一分以内に書きあげられました。そのときの速さは、なにか機械から文字が作り出されているという感じがしました」。この池田勇の随想は、その前年に亡くなった田中の人となりや弟子の目から余すところなく描き出している。

*3 小笠原拓「文検国語科」の研究」（『地域学論集』第四卷一号、二〇〇七年）参照。文検受験に奮闘した自らについて、田中も『枕草子二十年』「受験回顧」で述べている。

*4 佐佐木信綱、一八七二（明治五）年～一九六三（昭和三八）年。鈴木「近代歌学の出発―竹柏園と博文館」（『明治国家の精神的探究（明治の精神）をめぐって』二〇〇八年、以文社）で取りあげた。

*5 「春曙文庫」には校本に使われた吉田幸一旧蔵の伝本、富岡本・伊達本などが伝わる。吉田旧蔵本が田中のもとに伝えられていることは、吉田の助力のあとをうかがわせる事実である。

*6 田中はすでに日本古典全書『枕冊子』（一九四七年、朝日新聞社、なお底本は後述の新編日本古典文学全集と同じ）などの注釈書や『枕冊子本文の研究』（一九六〇年、初音書房、本書により文学博士の学位を受ける）などの研究書をもっている。また同じ時期に対訳古典シリーズ『枕冊子』（旺文社文庫、上は一九七三年、下は一九七四年、本文は三巻本）も出している。

*7 底本は三巻本系統第一類本とされる陽明文庫蔵本、ただし第一類までの欠けている部分（七五段まで）は春曙文庫所蔵本（弥富破摩雄旧蔵）を用いている。当該段は春曙文庫本の部分である。したがって、能因本を底本とする全注釈とは系統本文は違う。なお当全集は後述の「怖ら笑ふ」と解く説によっている。

*8 田中に対して「池田亀鑑同門の畏友」（後述）という萩谷であるが、その反目は強い。同い年ながら歩んだ道は異なる。独学で身を立てた田中に対して、萩谷は東大で池田に学んでおり、学歴にも大きな違いがある。『平安朝歌合大成』という不滅の業績があり、枕草子関係の著作には『枕草子』（新潮日本古典集成、一九七七年、新潮社。第九回日本文学大賞受賞）や『枕草子解環』全五巻（同朋舎、一九八一年、第一巻刊行）、『枕草子解釈の諸問題』（新典社、一九九一年）などがある。また萩谷は自伝的な随想『歌合巻発見と池田亀鑑先生の一、その二』（水荃）一九九四年一六号、一七号）、『知らザルヲ知らズトセヨ、之レ知ル也（上）（下）』（『古代文化』一九九八年一月、一一月号）を残している。浅田徹『萩谷朴』『平安朝歌合大成』への道（『戦後和歌研究者列伝』笠間書院、二〇〇六年）に「氏のおびたしい著作のはしはしから、強烈な個性が感じ取られるのは間違いないが（例えば大著『本文解釈学』（河出書房新社・平成六年）は、その書名から想像されるのとは違って、氏をめぐる人間関係の軋轢の回想が少なからぬ部分を占めている）」とある。その『本文解釈

学』中に、『枕草子全注釈』について「苟くも、全注釈などと銘打った、より詳細な論述の可能な、準営利的出版物にあつては、その著者に、第一発見者に関する正確な紹介を求めることは当然であろう。しかしながら、残念なことに、池田亀鑑同門の畏友田中重太郎氏の『枕草子全注釈』第三巻を例に引くならば、その一冊には、本部第十条（9）（17）の備考として掲示した私の業績から、（中略）通計三十三項目が引用されているし、甚だしくは、「諸問題（28）」からは、（中略）私の文章をそのまま転載したばかりか、私の作製した『清水寺の構造』（想定図）をも、一往典拠は示しているものの、そのまま複写転載していながら、一切、私自身には了解を求めることもなければ、著書を恵与されることもない、甚だ礼を失したものであった。（中略）長年苦心の拙考を無断引用する非礼は、同門の誼みとして我慢するとしても、長々と引用した挙句、筆先では、卓見だの卓説だのと持ち上げておきながら、「定説としては従い難い」の極まり文句で、何の根拠もなく否定し去る態度には、『校本枕冊子』の大著によつて、枕草子研究者のすべてに測り知れない学恩を均霑せらるる程の碩学とは思えぬ遺憾さを禁じ難い」などの記述がみえる。

*9 田中の注釈態度には、いうまでもなく先学の研究を重要視する配慮がうかがえる。たとえば、池田勇「田中重太郎先生の思い出」（前掲）に「先生は『枕』の解釈で、「そう多くオリジナルが出せるものではない。それよりも先学の注釈を学びなさい。」とおっしゃいました。先生の中保町のお宅で、ほろほろになった金子元臣氏の『枕草子評釈』をみたことがあります」などである。「春曙文庫」には古典籍のほか田中旧蔵の洋装本が多数所蔵されている。その中に金子元臣『枕草子評釈』が数冊あるが、うち「昭和拾壹年正月拾参日購入」と記された田中の所謂受験時代に購入した書があり、書き入れからその勉強ぶりがうかがえる。図書館に配架された蔵書類をながめていると、田中の学問を知るために、今後「春曙文庫」所収の洋装本について考察するべきものとあらためて思われる。

*10 「春曙文庫」について、柿谷雄三による、二〇〇二（平成一四）年

一〇月に相愛大学で開催された「中古文学会」での挨拶文から引用したい（稿者の手元にある下原稿は書き入れ・訂正などがみえる、適宜に修正した）。

さて、中でも田中重太郎博士は、校本・総索引・全注釈等、清少納言枕草子の文献学的研究に大きな業績を残しておられます。わたくしははやくから、田中博士の許で、校本・総索引のお手伝いをさせていただいていた一人でございますが、先生の学問研究とくに文献蒐集については、並々ならぬ偉大な方であったと思います。池田亀鑑博士の学問の影響をよく受けられ、また古典文庫を永年刊行してこられた東洋大学の吉田幸一博士とも御親交が深かったので、その影響もありませんであったと思います。

昭和六十三年（一九八八年）本学は創学百周年を迎えることとなりましたが、その前年五月十六日、惜しくも田中博士は急逝されました。歴大な古典籍―写本・版本類―と研究途上の諸資料をたくさん残して。そこで、当時の学長森川晃卿先生、学園長松村了昌先生らが、相愛学園創立百周年記念事業の一つとして、田中先生の枕草子関係のご蔵書を学園図書館へお譲りいただけたら。というご提案をなさり、ご遺族の田中美保子様、田中重雄様のご理解のもと、無事話がまとまり、ご蔵書は本学へ預託されることとなりました。

昭和六十三年十月二十六日から十一月五日まで、これら田中博士愛蔵書と図書館蔵の貴重書を併せて「古典籍資料展」が開催され、これらのコレクション蔵書を「春曙文庫」とよぶようになりしました。それは何ととっても、田中博士の蔵書が大部分をしめるため、後に「春曙文庫目録（和装本編）」（平成五年三月刊行）に収めた点数は九九一点中、田中博士旧蔵書八四三点（85.06%）、今小路先生旧蔵書五六点（5.6%）、図書館既蔵書九二点（9.3%）、清少納言・枕草子研究の権威で、その冒頭の「春は曙」の一節をこよなく愛され、色紙等にも好んでこの語句を揮毫され、ご自身も「春曙庵主」と称して蔵書印まで作っておられ、愛蔵書の一部に押捺してお

られたことなどから、この一聯の「古典籍資料類」を「春曙文庫」と呼んで、大切に保存管理することが学界のために肝要なことであると、関係者一同、意見の一致をみたためであります。

さて、平安時代の文学を専門領域にする「中古文学会」と田中重太郎の関わりについて、述べるべきであるが、以下に学会設立をめぐる二人の見解を引いて付記することにとどめる。まず、片桐洋一「平安文学五十年」（和泉書院、二〇〇二年）に「田中重太郎さんのエピソードなどを聞かれて」（平安文学研究会と大阪国文談話会）として次のようにあり、

当時、夫人をなくされた田中重太郎さんは、相愛短大に勤めていらっしゃいましたが、そこで助手をされ、研究会にも一緒に出ておられた、服部さんという方と再婚されました。田中さんは、そのころ四十歳代後半だったかと思いますが、最愛の妻を得たという喜びを、私たちにも話されます。とても純粋な方で、新しい奥さんに双子のお子さんが生まれて、典子、雅子と名づけられたお嬢さん方の写真を集めた本や、奥さんとのなれそめを書いた本なども作られて、私たちにも下さいました。前にも述べましたように、非常に苦労もされた方なのですが、純粋なロマンチストという面をもっておられ、そういうところが「平安文学研究」の資金面を、一人で支えるというように表れているのだと思います。吉田幸一さんが、お一人で宛て名書きや、「会費××円をお送りくださいまし」というようなことまで書かれて、古典文庫を支えておられたように、発送の封筒の表書きまで田中重太郎さんの字で書かれて送られて来るような雑誌でした。ですから、もちろんご本人も執筆しておられますが、その量は少なく、むしろ雑誌を作る世話役にもまわられていました。みなさんの学問を発展させようという意志がおありになったのです。

さらに「中古文学会の創立が遅れたことを聞かれて」（中古文学会のこと）に、

田中重太郎さんの平安文学研究会についてお話ししましたが、それまで平安文学関係の学会がなかったと言えば、田中さんに叱られるんじゃないかと思えます。戦前・戦中から皇朝文学研究会があって、今残っておられる人では三谷栄一さんくらいの世代の人たちでやっていたそうです。これは東京中心でしたが、それに続いて作られたのが、京都の平安文学研究会です。京都から出発したということと、田中重太郎さんが立命館大学予科の教授をしてもらったので、国公立大学系統の人達が近付いてこないということがあって、かなりの活動はしておられたのですが、会そのものは私的なものから抜けきれない面も持ち合わせていました。しかし、それでも、前に述べましたように、昭和三十年代には、全国的な学会という形は整っていませんでしたから、中古文学の全国的な学会が全くなかったと言いと異論を唱える人がいると思うのです。そんな中で、田中重太郎さんの平安文学研究会の活動が活発になればなるほど、この会を發展させて新しい会にしようという考え方と、全く新たに作るよという考え方と両方が出てきました。しかし、結論は後者になり、第一回大会が昭和四十一年十一月五日に東洋大学で行われましたが、その少し前に、設立準備会がやはり東洋大学でありまして、私もまだ三十歳代前半だったと思いますが、指名されて出席した記憶があります。東洋大学の中心人物である吉田幸一さんは古典文庫をやっておられるという実績もありますし、平安文学研究会の援助までしておられたように、田中重太郎さんとも親しい関係でしたので、平安文学研究会との間をスムーズにやってくためにも、吉田幸一さんが中心人物になるのが一番良いのではないかとということで、東洋大学で事務局を引き受けていただいて、第一回大会も昭和四十一年十一月の五日と六日の二日間にわたって東洋大学で出発の総会が行われたのです。

とある。田中が主導した平安文学研究会の活動（機関誌『平安文学研究』の発行など）は大きな業績のひとつとして数えるべきであり、

これが学会の設立に関係した事情もあったに違いない。ただし、次のように回想する学者もいる。松尾聡「中古文学会設立のころ」（『中古文学』創立三十周年記念臨時増刊号、一九九七年三月）を引く。

戦後、上代文学から近現代文学にいたるまで、整然とそれぞれの分野の学会が成立したのに、どうして中古文学会の設立だけがおくれたのかというと、明けっ放しというならば、それは当時東京大学助教授であった池田亀鑑博士のことを学界が忌避したからでした。博士が存在することによって学界に混乱が生じ、博士への不信があるゆえに学会設立の話が進捗しない状態になっていました。（中略）学界の多くの方々のご支援もあり、戦前からしきりに中古文学会設立の話はありました。しかしどうしても越えられない問題を前にして、頓挫していったのです。（中略）戦後の混乱もおさまったころ、教授にまだ昇進したばかりだということの池田博士が亡くなりました。昭和三十一年のことでした。そして時代はめざましい高度経済成長の方向に向かいました。その昭和四十一年十一月、やっと中古文学会は全国の研究者を一堂に集めて設立の日を迎えることとなりました。（中略）中古文学会運営の主役は、なんとといっても東洋大学名誉教授であらせられる吉田幸一先生でした。中古文学会の円滑な事務運営は、吉田さんの献身的なご努力のたまものでした。

松尾聡は日本古典文学全集の『枕草子』校注者のひとりであり、池田亀鑑、吉田幸一など、いずれにしても、学会の設立に関して、田中の周辺に動きがあったことがうかがえ、『枕草子』研究のその後の動向とあわせて興味深い。